

友聯社の創立と 東南アジアとの出版ネットワーク

谷垣 真理子

「1950年代・60年代の香港とシンガポールの出版ネットワーク」というテーマは、香港の多面性を浮かび上がらせる。香港はイギリス植民地として155年の歴史を有し、中国世界と西洋世界をつなぐ存在として語られてきた。「西洋世界」とはとりもなおさずイギリスであった。しかし、「西洋世界」にアメリカを加えると、香港は別の側面を見せる。1950年代と1960年代という時期を設定することで、アメリカを中心とする冷戦構造に香港がいかに巻き込まれたのかという視点を立てることができる。香港にとっての冷戦構造の影響は、中継貿易港としての機能が壊滅的な打撃を受けただけではないことが浮かび上がってくる。

本プロジェクトの中で筆者に求められているのは、「1950年代・60年代の香港とマレーシア、シンガポールとの出版ネットワーク」について、香港側の状況を明らかにすることである。本稿はそのための下準備的な論稿である。筆者は友聯社を取り上げ、冷戦構造の中で香港がいかに文化的な側面でも影響を受けたのかを明らかにしたい。

冷戦期、アメリカは世界規模で文化広報宣伝活動を展開し、フォード財団やアジア財団は積極的にアジアで文化活動を支援した。友聯社はこうした支援を受けた「美元団体」「緑背団体」(美元は米ドルの意。米ドル札は緑が基調。緑背はアメリカの支援を受けたという意)のひとつであった。

友聯社はアメリカの財団からの支援が終了しても存続し、「美元団体」の中ではもっとも成功した団体であった。同社にはチャイナ・ウォッチングの基地としての友聯研究所、友聯出版社、印刷所が備わっていた。対外的にはチャイナ・ウォッチングの基地としての友聯研究所が著名であり、香港域内では友聯社は

中国大陸に焦点をあてた『祖国周刊』、中学高校生の投稿を主に受け付けた『中国学生周報』のほか、子ども向けの『児童樂園隔週刊』、大学生以上に向けた『大学生活隔週刊』など、複数の定期刊行物を発行した。

本稿では友聯社幹部へのインタビュー集を利用し、まず、友聯社の成立の背景について、インタビュー集からその成立の経緯を整理する。次に、在米の著名な歴史家であった余英時 (Yu Ying-shih) が回想録でまとめていた創立幹部の特徴を、インタビュー集からも後付けしたい。その上で、マレーシア・シンガポールで友聯社が行った活動を、インタビュー集と友聯社が発行した文芸雑誌『蕉風』から整理して、来年度のプロジェク活動の基礎としたい。

なお、馬華文学とはマラヤ半島における華語文学を指す。マラヤ半島の政治的状況によって、「馬」を「マラヤ」もしくは「マレーシア」と訳出しわけなければならないので、本稿では混乱を避けるために「馬華文学」を使用し、必要がある時にのみ「馬」の表す内容を説明する。

1. 友聯社をめぐる資料と研究

盧瑋鑾と熊志琴 (共編) による『香港文化衆声道』が友聯社の基礎資料を提供する [盧・熊 2014, 2017]。同書は2巻本であり、友聯社が発行した『中国学生周報』の編集に中心にかかわった18名の幹部についてのインタビュー集である。『中国学生周報』(*The Chinese Student Weekly*) は友聯社傘下の友聯出版社から1952年から74年まで発行された週刊誌である。この時期の香港や東南アジアの華僑華人の若者に影響を与えたと言われる。これに先立って、盧瑋鑾は2003年に香港中文大学図書館の「香港文学資料庫」

に『中国学生周報』を全号デジタル化して公開した
[香港中文大学大学図書館 2003]。

盧と熊の資料集には、創立に直接かかわったメン
バーへのインタビューは含まれておらず、それらの
創立メンバーと直接交流のあったメンバーにインタ
ビューが実施されている。友聯社の創立早期に関わっ
た余英時の回想録[余 2018]もよく読まれている。

香港出版学会による『書山有路』[香港出版学会
2018]は、友聯社の関係者について『児童樂園』の張
浚華以外直接取り扱っていないものの、第二次世界
大戦後の香港の出版業界全体の発展を把握するうえ
で有用な1冊である。前半の「香港出版業発展」では
中華人民共和国に共感を寄せる香港左派の出版人が
主体であるが、後半の「香港出版專題」ではそれ以外
の出版人も取り上げている。

2. 友聯社の創立

友聯社の成立を前述の[盧・熊 2014]と[余 2018]
をもとに整理してみよう。

余英時は、友聯社は香港に南下してきた知識青年
によって発足したと語っている。創立幹部には、香港
生まれはおろか、広東人もいない。余によれば、最も
初期の設立メンバーは約20名で、約10名のリーダー
を中心としたグループであった。その年齢は、24歳
から32歳までで、1949年以前に中国大陸で大学を卒
業し、香港へと南下してきた移民であった[余 2018:
135-136]。

たとえば、『児童樂園』の編集を1994年まで担当し
た張浚華(1938年香港生まれ、本籍は広東新会)は、
友聯社の年長の幹部を次のように語っている。

「友聯」の燕雲は「燕大」[燕京大学]の出身で、
徐東濱は「北大」[北京大学]の出身で、英語は秀
逸で、国際社会との距離を感じさせない存在で
した。私は『(中国学生)周報』でまだ彼らと知り
合っていませんでしたが。(友聯社の幹部の)中
には広東語が本当にわからない人もいました。た
とえば、趙聰がそうでした。彼も北京大学出身
で、中国の古典文学の知識を言うならば、彼が最
も精通していました。彼は文学や歴史の世界に
遊び、それを楽しんでいるようで、香港の社会に

溶け込むつもりはほとんどないように思えまし
た。友聯の一部の先輩には語学の素質がない人
や、広東語を学ぶ気持ちもない人もいました[盧・
熊 2017: 193]¹⁾。

このように、友聯社の創立期のメンバーは中国大
陸から香港に移住してきた者が多く、「広東語ができ
ず、香港の社会に溶け込むつもりもない」ような外省
人的雰囲気があった。友聯社が正式発足する以前、許
冠三や陳思明などの創立に関わったメンバーは「自
由出版社」に集っていた。

自由出版社は、1950年代初めに米国広報文化交流
局(United States Information Agency)から資金援
助を受けた文化出版機構の1つである。謝澄平が総
責任者(主要負責人)であり、司馬長風(胡欣平)、徐
速、黃思騁などの著名な作家が同社の編集やデザイ
ンの仕事を担当していた。同社の出版物には反共産
主義、望郷、ギャング(反共、懷郷、流氓)をテーマに
したものが多く、同社が発行する週刊誌『自由陣線』
では、第三勢力の政治思想をアピールする記事が多
く掲載されたほか、1958年にノーベル文学賞を受賞
したソ連のバステルナークの小説『ドクトル・ジバゴ』
を許冠三と齊桓合が翻訳している[香港中文大学
大学図書館 2008]。

自由出版社は、第三勢力に属した中国青年党との
関係が深かった。自由出版社に出入りしていた友聯
社の創立メンバーは、青年党の左舜生や李璜との往
来が密であった[盧・熊 2014: 11]。このため、創立
メンバーは香港の第三勢力と関係を構築し、邱然と
陳思明、胡欣平、徐東濱、許冠三が民主中国青年大
同盟に参加していた[陳 2011: 92]。民主中国青年同盟
は、謝澄平が第三勢力の人材若返りのために組織し
た[陳 2014]。

第三勢力とは、中国国民党とも中国共産党とも異
なる第三の道を希求するグループである。第三勢力
は(1)中華民国の中国大陸時期と(2)1950年代の香港で
運動が展開された時期に分かれる。中村元哉の整理
によれば、中華民国期の第三勢力は中国青年党(1923

1) 原文:「友聯」的燕雲是「燕大」[燕京大学]的, 徐東濱是「北大」
[北京大学]的, 英文了得, 跟國際社會都沒有距離, 我在『周報』
還未認識他們呢! 有些廣東話真的不懂, 例如趙聰, 他也是「北
大」的, 論中國古典文學知識, 他最淵博。他游走於文學歷史世
界, 自得其樂, 似乎無意融入香港社會。有些「友聯」前輩沒有語
言天分, 有些不願學廣東話。

年にパリで結成)、国家社会党(1932年に結成、のちの中国民主社会党)、中華民族解放行動委員会(前身は中国国民党臨時行動委員会、のちの中国農工民主党)、救国会、中華職業教育社、鄉村建設協會を指す総称として使われた。これらは統一建国同志会を基盤にして中国民主政団同盟(1941年)、後に中国民主同盟(1944年)を結成した[中村 2018: 234-235]²⁾。

第二次世界大戦後に国民党主導の憲政移行に反対したため、中国民主同盟は1947年に解散に追い込まれた。一部は中国大陸に残り、中国に協力したが、香港に渡ってアメリカの支援を受けて活動を続けた人びともいる。国民党香港工作組による「留港華人政治活動現状」(香港在住華人の政治活動現状)についての報告書は、第三勢力の主要なリーダーとして、許崇智(民主反共同盟)と張發奎(桂系[新広西系]の軍人)、顧孟餘(国民党左派の要人)、黄旭初(桂系の軍人)、任援道(汪精衛政権で陸海軍を統括)、謝澄平(『自由陣線』を主催)をあげた[黄 2020: 241-242]。その顔ぶれは汪精衛と繋がった汪派と桂系の軍人がめだつ。中村によれば、日中戦争勃発後、中国の主要都市は次々と陥落し、その時、研究者やジャーナリスト、文化人などの知識人の避難先のひとつが、広西の桂林であった。広西では李宗仁の国民党広西派が優勢であり、李宗仁は蒋介石との対抗関係において、共産党や左派関係者を受け入れていた[中村 2018: 140-141]。

友聯社の発足が何年かは正確にわかっていない。インタビューイーの何振亜は、友聯社が出版を始めたのが1949年末か1950年初めなので、友聯社の発足は1940年代後半だと語っている[盧・熊 2014: 11]。創立当時の友聯社の考え方を示すのが、3冊の本(友聯のパフレットと出版目録)である。何へのインタビューの際に何が盧に紹介している[盧・熊 2014: 11-12]。友聯社の設立趣旨は「政治は民主的であれ。経済は公平であれ。社会は自由であれ(政治民主、経済公平、社会自由)」であった。パフレットの中で、友聯社は自らを次のように紹介している。

2) 陳正茂は中華民国期の第三勢力を「三党」(中国青年党と鄧演達の第三党(1930年、国民党臨時行動委員会)、張君勱の国家社会党)と「三派」(梁漱溟の鄉村建設派と黄炎培の職業教育社、沈鈞儒の救国会)と整理している[陳 2011: 2]。その構成団体は中村の整理とは変わらない。

中共が優勢になってから、多くの中国人が大陸から自由世界へと逃げてきた。彼らの逃亡は、その多くは肅清から逃れるためであるが、ある人々には別の考え方があった。彼らが[中国]大陸に残っても、肅清されることはなかったであろう。実際、彼らが望めば、特権階級に加わって他人を肅清することも可能であった。彼らが自由世界にやってきたのは、彼らが自由を選択しただけでなく、彼らは責任感を持ち、[中国]共産党統治を打ち砕き、中国の民主社会の建設に貢献しようとして決意したからであった。これらの人々の中には、すでにこの運動に自分の身を投じた青年知識人がいた。彼らは大陸が陥落する以前に、青年組織を組織して文化工作の仕事を進めていた。この結果、2か所の学校とひとつの研究所、2つの雑誌を始めていた。今、彼らは人も土地にも慣れていない香港で難民となった。彼らは本当に貧しく、ある者は、香港に到着した時、歯ブラシ1本をわずかに手にするのみであった[盧・熊 2014: 13]³⁾。

創立趣旨では、友聯は中国共産党への反対を明らかにしている。王健武(シンガポール・マラヤに10年滞在)は、「当時、われわれ一群の人間は、国内の情勢には賛同できないから出国した。国民党でもないし、共産党に賛同するわけでもない。これらのひとつは出国してきても、台湾にも行きたくはなかった。それで多くの人々は「友聯」は第三勢力だとみなした⁴⁾と述べている[盧・熊 2014: 148-149]。ただし、奚会暉は「『友聯』は反共産党であり、反台湾であるから、第三勢力だ」というロジックには異議を唱えている。「国民党が大陸時代に行った一連の政策には反対しており、台湾に移動してから民主を実施していない」こ

3) 原文：自從中共開始得勢，許多中国人逃出大陸到自由世界來。他們的逃亡，多半是為了避免被清算；可是有些人是另有想法的。他們如果留在大陸，並不会被清算；事實上如果他們願意，他們大可以投身特權階級去清算別人。他們到自由世界來，並不僅為他們選擇自由，而是帶着責任感，懷着決心要貢獻身與共產統治的摧毀，和中國民主社會的建立。

在這些人之中，有一群早已貢獻於這一運動的青年知識份子；他們在大陸淪落以前曾經進行組織工作和文化工作，辦了兩所學校，一個研究所和兩個雜誌。現在他們能在人地生疏的香港成為難民。他們很窮；有的人到香港是，隨身只待了一柄牙刷。

4) 原文：當時，我們這群人，都是對國內清醒不贊同而出來的，既不是國民黨，也不贊同共產黨，這群人出來以後，台灣也不想去，所以很多人為「友聯」是第三勢力。

とを批判するが、必ずしも反台湾ではないと語っている[盧・熊 2014: 62-63]。

友聯の創立趣旨は同時に、香港を含む海外へと逃れた知識青年の中には、知識人としての責任感を持ち、自由民主の社会を構築することを目指す一群がいることを主張している。友聯の早期のメンバーに新亜書院の出身者がもっとも多かった[盧・熊 2014: 11, 15]のは、「知識人としての責任感」と「自由民主の社会の構築」が新亜書院の建学の精神と共鳴しているのではないだろうか。新亜書院は1949年に、北京大学教授であった錢穆(思想史)が中心となって設立された。宋・明代の学問のエッセンスと西欧の大学の個別指導体制を融合させた教育機関を設立することが目指された。唐君毅や牟宗三、徐復観など新儒家の思想家をはじめとして、中国大陆からの移民学者が講義を担当した。書院の授業言語は中国語であり、錢穆は新亜書院を中国儒学の復興基地としてとらえた。1963年には、新亜書院は崇基書院(1951年に香港のプロテスタント教会が設立)と聯合書院(1956年に私立学校8校が合併して設立、中文大学発足時は5校)とともに香港中文大学を発足させた[谷垣 2018: 367-368]。盧と熊の『香港文化衆声道』2巻の18名のインタビューイのうち、新亜書院出身者は6名、香港中文大学出身者は3名であった。ただし、新亜書院出身者が友聯社には多かったが、派閥は作らなかったと何振亜は回顧している[盧・熊 2014: 15]。

3. 友聯社の創立幹部

『香港文化衆声道』のインタビューイのうち、友聯への参加がもっとも早かったのは何振亜であり、次いで奚会暉であった。回想録の中で友聯に言及した余英時は奚会暉と同時期に友聯に参加している。以下、これら3人のインタビューと回想録から人物像を整理してみよう。

何振亜は自身が1950年に友聯社に参加した時には、陳思明と史誠之、許冠三がいたこと、その後の活動では陳思明と邱然、徐東濱がコアメンバーであったと述べている[盧・熊 2014: 15, 17]。何振亜より少し遅れて1951年に友聯社に参加した奚会暉は、創立時のコアメンバーとして、陳思明と徐東濱、胡欣平、史誠之、邱然をあげた[盧・熊 2014: 55]。奚会暉と

同じ時期に友聯社に参加した余英時はコアメンバーとして、徐東濱と胡欣平、邱然の3人をあげ、創立時のメンバーとして許冠三を、友聯社の企業的基礎を築いたメンバーとして陳思明と奚会暉をあげた[余 2018: 136-140]。傅葆石は、友聯社とアジア財団の関係をアジア財団の資料を使って論文にまとめたが、友聯社の発起人として陳思明と徐東濱、余徳寛の3名をあげている[傅 2019: 68]。

以下、友聯社の創立幹部を、(1)創立時に参加したが、何らかの理由で友聯社を脱退した者、(2)友聯社の創立初期のコアメンバー、(3)友聯社の企業化に努力したメンバーに分けて列挙する。インタビュー集の中では、何振亜と奚会暉は創立時のコアメンバーを語るという姿勢であったが、ふたりもまた友聯社の企業化に貢献しているので創立メンバーに入れる。

(1) 創立期参加メンバー

創立時には参加していたが、許冠三はまもなく友聯社を去り、史誠之は早くに他界した。

許冠三：許冠三は1925年生まれで、1947年に東北大学を卒業した。許冠三は、自由出版社の謝澄平の要請を受け1950年に香港に来港し、自由出版社の編集業務を担当した。その縁で友聯の発足にもかかわった[余 2018: 139]。謝澄平は許冠三の大学時代の恩師で、1949年には台北に移動し、傅斯年・台湾大学校長の秘書を務めた。余は友聯社が第三勢力の中でもっとも成功した原因を「お互いを尊重した」ことに求めており、「許冠三は唯一の例外であり、別々の道を歩まざるをえなかった」と述べている[余 2018: 139]。許冠三はその後、孫述憲と人人出版社をつくり、『人人文学』を発行した。許はまた香港中文大学で教鞭を執り、『我所了解的自由』『新史学九十年』『史学与史学發展』を著した[盧・熊 2014: 13]。

史誠之：史誠之は、何と奚のほかにも孫述宇も友聯の最高層としてあげている[盧・熊 2014: 127]。『歴史転排拆与中国前途——論解放軍的過去与中共的未来』や『論中共的軍事發展』を著したが、王健武は「史誠之は最も早く他界した」[盧・熊 2014: 149]と語り、古梅も「彼は[早くに]他界して長い時間が経っており、彼について知っている者はそれほど多くない」と語っている[盧・熊 2014: 100]。

(2)友聯社の創立初期のコアメンバー

何振亜、奚会暉、余英時の3人のインタビューや回想録から、友聯社のコアメンバーとして徐東濱、胡欣平、邱然の3人と、陳思明の存在は大きかったと考えてよいだろう。

徐東濱：徐東濱は1927年に北平（現在の北京）で生まれ、本籍は湖北省恩施県であった。徐東濱は香港で一時期許崇智という別名も使ったが、もともとの徐東濱に戻した。そのほか岳中石、岳心、蕭独、藕芽生、呉拾桐、祁弾、張西望、呂洞賓、王延芝など複数のペンネームがあった[盧・熊 2014: 167]。日中戦争中に北京大学、清華大学、南開大学が合併した国立西南聯合大学の外国語学部に入學した。戦時中は通訳の訓練を受け、アメリカ空軍に通訳として働き、戦後は北京大学の西洋言語学科に再入學した。友聯では英語力を買われて、アジア財団などのアメリカの財団との交渉や連絡にあたった。中国の対外関係や国際政治への理解も深く、友聯出版社の編集長兼社長、友聯研究所の所長などを歴任した[余 2018: 136]。

1959年に友聯社と星島系新聞社がマラヤ連邦のクアラ Lumpur で『中文虎報』（吉隆坡虎報として知られる）を準備して立ち上げた。同報が廃刊すると、1964年に香港に戻り、『星島日報』で主筆を務めた[盧・熊 2014: 168]。その後コラムを担当した。1973年から78年まではTIMEで『時代叢書』の総編集を、1981年には『明報』の総主筆を務め、社説を書いた。1989年には引退してサンフランシスコに居を定めたが、1995年初めまで『明報』に社説を毎週1回執筆していた。1995年10月に他界した[盧・熊 2014: 167]。

胡欣平⁵⁾：本名は胡若谷で、胡永祥、胡靈雨、胡越、胡欣平とも称した。ペンネームとしては秋貞理、曾雍也、范澎濤、林吟、羅晴、高節、巖静文などがある[盧・熊 2014: 34]⁶⁾。余によれば、マルクス主義や中国共産党に関する著作では胡越、文学などの著作では司馬長風を使ったという[余 2018: 137]。

胡は東北で生まれ、国立北平大学を卒業し、日中戦争勝利後、国民大会代表となった。1940年代後期に香港に来港し、民主中国青年大同盟のメンバーとなり、友聯社の創立に関わった。その後、香港で樹仁学院

や香港浸会書院で教鞭を執り、1980年代にアメリカニューヨークで病死した[盧・熊 2014: 34]。著書に『中国新文学史』や『郷愁集』がある。友聯社では『祖国周刊』の初代編集長をつとめた[余 2018: 137]。

邱然：邱然はマリア・イェン (Maria Yen) であり、友聯社では「燕帰来」として知られていた。ペンネームは燕雲である。北京大学西洋言語学科で徐の一級下で、英語と中国語に精通していた。

邱の父は中国における自由主義の先駆者の邱椿（字は大然）で、胡適と同世代であった。邱椿は北平師範大学や北京大学、北京師範大学（北京大学の教育系が北京師範大学に編入）で教鞭を執った。邱椿は青年党に参加した関係で国民党から除籍された⁷⁾。邱椿は1948年に健康上の理由で香港に渡れず、1949年の中華人民共和国の成立後、北京師範大学の教授を務めた。1966年の文化大革命のときにたびたび批判され、その年の9月に他界している[従 2019]。

邱然も友聯社の創立者のひとりであり、友聯出版社秘書長、友聯研究所所長をつとめた。友聯では徐と同じく、アジア財団などアメリカとの交渉・連絡役をつとめた[余 2018: 137-138]。邱然の父の友人であった桂中枢⁸⁾がアジア財団の香港責任者のジェイムス・アイヴィー (James Ivy) を邱然に紹介し、アジア財団と友聯社との関係が構築された[盧・熊 2014: 65-66; 傅 2019: 69]。邱然は1967年に友聯社を離れると、香港中文大学に短期間勤務し、ドイツで大学院に進み、博士号を取得し、チューリッヒ大学で教鞭を執った。邱然の著作には『紅旗下の大学生活』や『謝謝你們：雲、海、山』がある[盧・熊 2014: 63]⁹⁾。余によれば、邱は文化冷戦の中で重要な活動家であっただけでなく、散文や詩を発表した。また、1970年代末くらいにドイツの修道院に入り、彼女が人生

7) 従立新の論稿には「邱椿は1946年春に帰国すると、青年党から国民参政会参政員に推薦されたが、固辞して青年党を台頭した。同年夏に国民政府から江西省政府委員兼教育庁長に推薦されたが、これも固辞したところ、国民党を自動的に除籍された(1946年春帰国後、曾經由青年党推荐担任国民参政会参政員、堅辞未就并退出該党。同年夏、国民政府任命邱椿為江西省政府委員兼教育庁長，亦堅辞未就并自動脫離国民党)」とある。同時期に両党籍を維持できたかどうか不明。

8) 四川省開県の生まれ。義和団事変後、最初の留学生としてアメリカに留学。1920年代に帰国して上海で『中国評論週報』(The China Critic) を発行。東呉大学で法律を学び、1928年に弁護士となり事務所を開設。1949年に香港に一家で移動。英文紙の Hong Kong Standard で編集に携わった。

9) 邱然についての記述は、特筆しないかぎり、[盧・熊 2014: 63] による。

5) 『香港文化衆声道』は司馬長風で立項している。

6) 胡欣平についての記述は、特筆しないかぎり、[盧・熊 2014: 34] による。

の後半でよりどころとしたのは信仰であったという
[余 2018: 138]。

陳思明：陳思明は陳維瑋、陳濯生とも名乗った。ペンネームは薛洛である。国立中央大学を卒業した。民主中国青年大同盟のメンバーであり、1950年代に『自由陣線』の編集を行い、その後、友人と友聯社を創立した。1955年にマラヤ連邦で友聯社の業務の発展にあたり、後にアメリカに移住した[盧・熊 2014: 11]。陳は丁庭標の娘婿であった[盧・熊 2014: 177]。丁庭標は国民政府立法委員を務め、江蘇省青年党のリーダー(負責人)であった。丁庭標は1949年に香港に移り、自由中国運動に参加し、自由出版社に入り、『自由陣線』の出版に携わった[盧・熊 2014: 177]。丁庭標は丁文江の叔父にあたった。丁文江は民国期の著名な地質学者・文筆家で、胡適や梁啓超、傅斯年の友人であった。丁文江の弟、丁文淵は同済医学印を卒業して、ドイツに留学し、国民政府行政院参議や考試院参議をつとめ、日中戦争の時期には同済大学校長もつとめた。丁文淵は1949年に台湾に行き、その後、香港に移住し、1950年に雑誌『前途』を創刊した[盧・熊 2014: 178]。

余德寬：余德寬は于之洋、蘇更生とも名乗った。ペンネームは申青である。北京輔仁大学を卒業し、香港に来てから『中声報』の編集にあたり、『中国学生周報』創刊時の発行人であった。1954年にシンガポールに行き、『学生周報』(シンガポール・マラヤ版『中国学生周報』)と『蕉風』を創刊した[盧・熊 2014: 18]。

(3)友聯社の企業化に尽力したメンバー

余は、友聯が他の「美元団体」と異なり、アメリカからの支援がなくなっても存続したのは、友聯社が現代的な企業に発展し、「友聯文化事業有限公司」となったことをあげている[余 2018: 139-140]。余は陳濯生(陳思明)と自身の友人であった奚の貢献が大きかったと述べている。兄・孫述憲が友聯社の創立に関わった孫述宇は、史誠と陳思明と並べて、何が友聯社の経理の仕事を担当したことを特筆している[盧・熊 2014: 120]。

何振亜：何振亜は1925年に上海で生まれた。本籍は安徽省である。国立中央大学に進学して、その後、青年軍に参加して従軍した。翻訳官を務めた他、落下傘部隊にも参加した。1949年に香港に来港し、1950

年に友聯社に参加した。何は著述を発表しなかったが、総経理として友聯の業務工作全般に責任を負い、友聯社を離れてからも、友聯関係者と連絡をとってきた。2003年に香港中文大学図書館に『中国学生周報』に関する資料を大量に寄付し、数年後に上海に定住した。2009年に台北にて客死した[盧・熊 2014: 9]。

奚会暉：奚会暉は1929年に瀋陽で生まれた。本籍は何と同じく安徽省である。1949年に香港に来港し、同年新亜書院経済系に入学した。新亜書院在学時代に、院長の錢穆の勧めで友聯社の活動に参加するようになった。1953年に新亜書院を卒業すると、友聯社でフルタイムで働くようになり、翌1954年『中国学生周報』の督印人(発行者)となった。1956年から59年にかけてシンガポールとマラヤ連邦で、友聯の活動の展開を図り、当地で『学生周報』の社長となった。1960年にアメリカに留学、1963年に工商管理修士学位(MBA)を取得して香港にもどり、友聯とアジア基金会(Asia Foundation)との連絡役となった。友聯出版社社長や友聯研究所秘書長を歴任し、1967年に家庭の事情でアメリカに移住した[盧・熊 2014: 49]。

(4)何と余、奚の友聯への参加のきっかけ

何振亜の友聯への参加は、後述する創立メンバーのひとりである陳思明とある日偶然道で出会ったことがきっかけであった[盧・熊 2014: 10]。奚と、錢穆の推薦で友聯に参加するようになった。邱然が1951年頃、新亜書院の錢穆を訪ね、何人か出色の学生を紹介してほしいと要請したことによる。錢は邱の父の中国大陸時代の長年の友人であった[盧・熊 2014: 54-55]。その時に推薦されたのが、奚と余英時であった[盧・熊 2014: 55]。

余は「1952年7月に友人から誘われて『中国学生周報』の総編集の職に就いた」と回想しているが、3か月ほどで辞め、『自由陣線』の兼職に戻った。余は自身自身が学生向け出版物の編集にはあまり向いていないこと、恩師である錢穆が新亜研究所を立ち上げる場所であり、余はその手伝いをするため、長期にわたって『中国学生周報』には携わることができなかった[余 2018: 141]。余の経歴は以下のとおりである。

余英時：余英時は1930年に天津で生まれ、本籍は何と奚と同じく安徽であった。ペンネームは艾群で

ある。1937年に日中戦争が勃発すると、余は安徽省の父の実家で過ごした〔余 2018: 15〕。1946年に父が東北中正大学の分学院院長代理として校務にあたると、余も同大学で補習を受け、翌年の大学受験に備えた〔余 2018: 64〕。1948年に余は燕京大学に入学した〔余 2018: 77〕が、国共内戦を避けて香港に南下し、新亜書院に転学した〔余 2018: 93, 95〕。1952年に同院の第1期生として卒業した。卒業後、香港の中学で教鞭を執ったが、55年に渡米し、ハーバード大学で学び、博士号を取得した。その後の人生の多くをアメリカで過ごし、ハーバード大学やイエール大学、プリンストン大学で教鞭を執り、一時期、香港の新亜書院の院長を兼任した。1974年に中央研究院院士に選ばれ、2006年には、人文科学分野のノーベル賞と呼ばれる Kluge Prize を受賞した。著書に『史学与伝統』、『猶記風吹水上鱗——錢穆与現代中国學術』、『人文与民主』などがある〔盧・熊 2014: 54〕。

4. 友聯の香港での活動

第2節で紹介した「友聯出版社」の創立趣旨から、1955年の段階で友聯出版社は「2か所の学校とひとつの研究所、2つの雑誌」を始めていたのがわかる〔盧・熊 2014: 13〕。2つの学校は特定できていないが、インタビュー集から、鄭萼芬が友人と夜間義学の形で開校していたこと、その後1960年代初めから『中国学生周報』からの支援を受けて政府に象徴的に1ドルの賃貸料を払い、黄大仙の公共団地の屋上で昼間授業を行う日校を開校した〔盧・熊 2014: 149〕ことがわかる。創刊年から類推して、2つの雑誌は『中国学生周報』と『祖国周刊』であり、ひとつの研究所とは、『祖国周刊』を発行した友聯研究所であろう。

友聯社傘下の友聯研究所は、1950年代から60年代にかけて現代中国研究者の間でよく知られた存在であった。冷戦時代、香港は西側諸国が「竹のカーテン」の向こう側の中華人民共和国（以下、中国）を観察するための「窓」の役割を果たしていた。この時期、チャイナ・ウォッチャーが必ず利用したのが、九龍塘壘皆老街155号の大学服務中心（Universities Service Centre, 以下USC）と、その近くの書院道9号の友聯研究所（Union Research Institute, 以下URI）であった。ふたつの機関はともに米国中央情報局（Central

Intelligence Agency）から財政支援を受けたと噂されてきた。ともに「美元団体」に属し、アメリカの文化広報活動を通じた文化冷戦の一部であった。

1968年に香港に着任したイギリスのジョン・ギティンクス（John Gittings）¹⁰は、1972年に発表した小論〔Gittings 1972〕の中で、香港でのチャイナ・ウォッチング活動を次のように説明している。彼は香港が反中国のプロパガンダや情報収集の拠点として機能していることを指摘している。香港で最大の情報収集拠点はアメリカ総領事館であった。これに対して、イギリスについては*Far Eastern Economic Review* という時事評論誌、外務省の地域情報局（Regional Information Service）、英国軍情報部、BBCのモニタリング・サービスの重要性を指摘している。

冷戦時代のチャイナ・ウォッチャーにとって、香港のUSCとURIはチャイナ・ウォッチングの重要な知的インフラであった。USCは、マッカーシズムが終息した時、アメリカの中国研究関係者がアメリカの中国研究を再度活性化するために1963年に香港で創設した機関であった。USCはアメリカからの中国研究者や博士課程院生の研究拠点であった。

一方、友聯社は1940年代後半には成立しており、その傘下のURIは1950年代から現代中国に関する新聞や定期刊行物のクリッピングを行っていた。中国で発行された新聞以外にも、香港や東南アジアで発行された新聞もその対象としていた。USCは友聯に使用料を払うことで友聯のクリッピングファイルを利用していた。しかし、1966年以降、友聯社によるコレクションの更新ができなくなったため、USCは独自にコレクションを拡充するようになった〔Vogel 2004: 13〕。

URIの資料は香港浸会大学（Hong Kong Baptist University）が購入し、1985年には現代中国研究コレクション（Contemporary China Research Collection）が発足した。その後、1990年代にかけて、浸会大学の図書館スタッフが、URIのインデックスにしたがって香港の新聞をクリッピングした。このコレクションには、1950年から1990年代までの6,500

10) ギティンクスは王立国際関係研究所（Royal Institute of International Relations, London）、国際関係研究所（Institute of International Relations, Santiago）を経て、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院（School of Oriental Studies）の現代中国研究所（Contemporary China Institute）に所属した。

冊のモノグラフやワーキングペーパー、4,000巻のマイクロフィルム、新聞や定期行物の新聞や定期行物からの1万4,000枚の切り抜きが含まれている [Hong Kong Baptist University Library 2019]。

5. 友聯のシンガポール・マラヤ／マレーシアでの活動

友聯社の質の高い刊行物は、香港だけでなく海外でも影響力を持った。『祖国週刊』や『中国学生週報』は同地に輸出された [余 2018: 140]。

(1) 東南アジアでの中文図書ビジネス

『書山有路』では、第二次世界大戦後の香港にとっての東南アジアとの書籍ビジネスについて1章を割いている。シンガポール華僑が開設した上海書局で、羅琅は1951年から働き、1970年代半ばから自身の書店と出版社を経営した。羅琅は、香港の東南アジアとの書籍ビジネスについて、以下のように語っている。

戦前の香港は中継貿易港で、多くの業界が東南アジアと貿易を行っており、出版業もまた例外ではなかった。その当時の「南洋」 [羅琅の用法、東南アジアの意] はまだ社会が十分に発展しておらず、自国で図書出版業が存在しなかった。そのため、華僑学校の教科書はすべて中国大陸の書店から輸入しており、主な供給先は商務印書館、中華書局、大東書局、世界書局、開明書店であった。シンガポールだけは、「華僑」 [羅琅の用法] がシンガポールで書局を開き、図書の輸入ビジネスを行い、毎年春と秋に教科書と雑誌を供給した。その中で比較的成功していたのが、上海書局と世界書局であった [香港出版学会 2018: 45-46]。

羅琅が勤めていた上海書局は陳岳書と王叔暘が開業した。陳岳書が上海書局を開業する理由は興味深い。陳はもともと1920年代に上海の実業公司につとめており、東南アジアに国貨 (中国産品) の輸出営業のため、タイやシンガポール、マラヤ、サラワク、蘭領東インドに派遣された。各地で注文を受けて、上海で注文の品物を調達する仕事を担当し、その後、シンガポールで僑興国貨公司を開業して、上海からの物資の小売り卸を行った。当初は日用雑貨を扱ったが、ある時、シンガポールまでの船上での時間があまりに長かったため、時間つぶしのために雑誌や書籍も仕入れた。その本と雑誌に予想以上に引き合いが

あったので、陳は商機を見て取り、上海にいた王叔暘と上海書局を開業し、雑誌の小売りと教科書の華僑学校への納入を始めた [香港出版学会 2018: 46]。羅琅によれば、世界書局も同様の状況であったという。

当初のビジネスモデルは、学校に必要な本が何かを知ると、上海か香港でその図書を購入し、上海からタイやマラヤ、シンガポールまで2ヶ月ほどの時間をかけて船で輸送した。しかし、本が売り切れると、新たな補充は難しかった。当時の教科書供給元は中華書局と商務印書館であった。両者は、輸送の時間を少なくするため、香港に印刷所を設置し、香港から直接東南アジアに輸送するモデルを構築した。商務印書館は香港島の北角に、中華書局は九龍土瓜湾に印刷工場を作った [香港出版学会 2018: 46]。

1949年に中華人民共和国が誕生すると、それ以前に編集した教科書は新中国の政策に合致せず、印刷発行できなくなった。このため、香港の商務印書館と中華書局では印刷する新書がなくなった [香港出版学会 2018: 47-48]。しかし、香港と東南アジアでは教科書の需要は存在した。現地で教学のためのシラバスはできておらず、第二次世界大戦前の中華民国の教科書を使い続けた。中華人民共和国の成立後は、中国大陸から教科書現物が輸入できないため、書店は販売する本がない状態であった。中にはマカオで海賊版や旧版の教科書を仕入れて、香港市場に供給する者もいた。

一方、日中戦争の時期に香港や東南アジアに避難した「文化人」も少なくなかった。香港については本稿の中で出てきた新亜書院や友聯社の関係者はその一群に入るであろう。東南アジアに避難した文化人の中には、現地での生活の中で、中華書局や商務印書館の旧版の教科書は東南アジアの実情に合致しておらず、東南アジアの事情に合わせた新しい教科書を編集しようという機運も生まれていた。かくて、第二次世界大戦後、シンガポールで『南僑日報』を創刊した胡愈之が、上海書局の陳岳書と王叔暘を説得して、教科書作成に乗り出した。陳岳書の妹婿の方志勇が香港で文化人滞留の文化人を組織して、シンガポール・マラヤ地区に合致した教科書を編集し始め、3年のうちに『現代小学課本』を完成した。香港に注目して言えば、香港の印刷所と出版人材が結合して、東南アジアの華僑学校教科書を出版したのである。

(2)友聯のマレーシア・シンガポールでの活動

1956年に友聯はマラヤ連邦とシンガポールでの業務の拡大を決定した〔盧・熊 2014: 61〕。前後してマラヤ連邦とシンガポールにはまず余徳寛、陳思明、邱然と奚会暉が向かい、その後、王健武、張海威、姚天平、古梅、黄崖、黎永振などが向かった。

この時期、マラヤ連邦では、マラヤ共産党による武力闘争が行われていた。友聯社のメンバーがマラヤ連邦各地を移動することそのものが危険を伴った。たとえば、食べ物を携帯していれば、政府からマラヤ共産党への支援物資と誤解されて逮捕・収監される可能性があったという〔盧・熊 2014: 60-61〕。こうした友聯社の活動を支えたのは、ふたりのマラヤの華人リーダーであった。

ひとりにはリョン・ユーカー (Leong Yew Koh, 梁宇皋) であった〔盧・熊 2014: 21, 60〕。梁の妻と汪精衛の妻は実の姉妹であった〔盧・熊 2014: 21〕。リョンは敬虔なカトリック教徒であり、友聯社の活動を評価していた。何や奚がマラヤ連邦に行った時、リョンは衛生部長を務めており、独立後はマラッカの州長を務めた〔盧・熊 2014: 60〕。何振亜によれば、リョンからマラヤで青年のために文化活動やメディアでの活動を行うように働きかけがあったという〔盧・熊 2014: 21〕。リョンは香港のカトリック教会のネットワークを通じて友聯社に接触したと推測される。

もうひとりにはロク・ワントー (Loke Wan Tho, 陸運濤) であった。ロクはキャセイ・オーガニゼーション (国泰機構) を経営し、シンガポールやマラヤ域内での映画館やレストラン、ホテルの経営にとどまらず、1953年には映画制作にのりだした。1956年には香港の永華電影を買い取り、国際電影懋業有限公司の創業者となった。ロクは奚を弟のように可愛がった。リョンが家庭の経済的事情から「州長」の座を降りなければならぬ時、奚はシンガポールのロクをたずねて事情を話し、リョンへの小切手を融通してもらった〔盧・熊 2014: 21, 61-62〕。このほか、邱然もマラヤの華人コミュニティで講演し、友聯を紹介し、民主思想を宣伝した。邱はしばしば農村や辺鄙な場所へと足を運んだので、リョン・ユーカーが同道することもあった〔盧・熊 2014: 65〕。

友聯社は『学生周報』(『中国学生周報』のシンガポール・マラヤ版) を発行するほか、華語教科書や文

芸誌『蕉風』を出版し、それらを販売する書店を開いた。『学生周報』はシンガポールやマラヤの各都市に拠点を作り、華語中学 (中高一貫) から優秀な学生を通訊員にスカウトし、香港と同様に合唱団や劇、文芸創作などの課外活動的活動を提供した。その主眼は「華僑青年に民主思想を宣伝し、中華文化を保存する」ことであった〔盧・熊 2014: 60〕。

奚会暉のインタビューから、奚と古梅は『中国学生周報』と学生活動を行い、その後黎永振や劉国堅が加わり、陣容が強化されたことがわかる。友聯社は香港でも評判の良かった『友聯活葉文選』をマラヤ連邦でも販売した〔盧・熊 2014: 152〕。『友聯活葉文選』は注釈が詳しく、香港の各中学が採用したテキストをほぼ収録していた。このため、香港の中学生は教科書と合わせて『友聯活葉文選』を購入した。友聯の翻訳書も校対を重ねて『三国(史演義)』『水滸伝』『紅樓夢』『金瓶梅』なども出版した〔盧・熊 2014: 149〕。

王健武 (本籍は安徽省、上海生まれ) は新亜書院経済学系に入学すると、在学時から『中国学生周報』の通訊部主任を務め、新亜書院を卒業すると友聯社でフルタイム勤務した〔盧・熊 2014: 141〕。王は1955年にはマラヤ連邦に渡り、1965年に帰国するまで、シンガポールに5年間、マレーシアに5年間滞在〔盧・熊 2014: 61〕しており、王が語る友聯社のマラヤでの活動は、他のインタビューイヤーよりも詳しい。

たとえば、王がマラヤに到着して最初に言われたのは、劇団を立ち上げることであった。王健武が設立した芸聯劇団は『北京人』、『花木蘭』、『秋海棠』、『雷雨』を公演した。友聯社のメンバーも俳優をやり、前述の奚会暉は『秋海棠』の主役をつとめた〔盧・熊 2014: 149〕。また、重要な学生活動に、キャメロン高原での3週間のキャンプ (生活営) があった。1948年のマラヤ共産党の武装蜂起に対して、山間部でのゲリラ活動での食糧・物資の供給源を断つために、地方部で華人を強制的に集住させて管理した。集住のために作られたのが新村であり、1954年までにマラヤ全域に480の新村が建設された〔坪井・村井 2011: 77〕。新村は鉄条網で周囲を囲まれており、友聯社によるキャンプが参加した通訊員にとってどれだけ印象深かったか、想像に難くない。王によれば、半世紀経っても連絡を取る者がいた〔盧・熊 2014: 153〕。また、当時の通訊員には後に香港中文大学で教鞭を

執った黄枝連がいた[盧・熊 2014: 23]。

なお、古梅(本籍は広東省、南京生まれ)は1955年から57年まで友聯社で仕事をし[盧・熊 2014: 83]、マラヤでの友聯社の仕事について次のように語っている[盧・熊 2014: 94]。華語教育の推進が大きな柱であり、そのために学生への働きかけが重要であった。マラヤで、華語は公用語ではなく、華語学校も多くなかったので、友聯社関係者は華語学校の学生と連絡を取り、通訳員のネットワークを構築し、華語による創作活動を奨励した。通訳員とのキャンプは、参加者は各校から優秀な学生を選抜し、2週間ほど実施したと回想している。

友聯社はその後、東南アジア現地に印刷工場を建てた。馬來文化公司是俞南琛と胡德馨の協力を得て、はじめて実現した。胡德馨は浙江大学附属中学の校長で、国立中央大学の教授を後に務めた。王健武は胡の附属中学時代の学生であり、陳思明と袁林、何振亜は国立中央大学時代の学生であった[盧・熊 2014: 155]。密な人間関係のネットワークの中で、友聯社は印刷所を建設し、地元の教員と協力して地元の実情にあった教科書を作成・印刷した。

(3)『蕉風』の文学観の変化

こうした現地化は『蕉風』の記事の変化にみられる。

『蕉風』はマレーシアでもっとも長い歴史を持つ華語による文芸誌である[黄 2021: 推薦序]。同誌は1955年11月10日にシンガポールで創刊された。マラヤ連邦の独立(1957年)の前に『蕉風』は創刊されたことになる。当初は32頁でB5判の文芸誌で月に2回発行される半月刊であった[謝 2019: 第1章第1節]。京都大学東南アジア地域研究研究所所蔵の『蕉風』のうち、第70期は1958年9月号、第71期は1958年10月号となっており、月刊誌に移行していたことがわかる。

1958年に『蕉風』はシンガポールからクアラルンプールに移転し、マラヤ連邦で出版されるようになった。その後、『蕉風』は第488期まで連続して出版されたが、1999年1・2月号をもって休刊した。『蕉風』は商業的な成功を目指してはおらず、毎号赤字が出ており、それをクアラルンプールの友聯文化事業会社が負担していた。しかし、長年編集を務めた姚拓が退職すると、『蕉風』は独立採算となり、休刊を余儀なくされた。

その後、出版基金を集め、ジョホールバルの南方学院の馬華文学館が出版を引き継ぎ、年に2回の形で『蕉風』を復刊させた[謝 2020: 第1章第1節]。京都大学の所蔵分で確認すると、2009年まで年に2回発行され、それ以降は年に1回の発行になったようだ。

京都大学東南アジア地域研究研究所所蔵の『蕉風』のうち、もっとも古いのが第70期であった¹¹⁾。第70期や第71期には、前述の王健武が発足させた劇団公演のうち『秋海棠』が紹介されている[滄海客 1958, 翁平 1958, 小丞 1958]。

『秋海棠』は、鴛鴦胡蝶派の作家・秦瘦鷗(1908-1993)の小説であり、『申報』紙上で連載(1941年1月から1942年2月まで。全332回)された後、単行本として刊行され、滬劇(申曲)、話劇、映画などへと改編された。主人公・秋海棠は京劇の男旦(おんながた)である。軍閥の袁宝藩は秋海棠の庇護者である。袁宝藩は学校視察の際に目にとまった女学生・羅湘綺を「姨太太」(第二夫人)とする。秋海棠は羅湘綺と情を交わすようになり、羅湘綺は妊娠してしまう。袁宝藩はふたりの仲に気が付き、秋海棠の顔を傷つけ、男旦として舞台上がれないようにしてしまう。この後、秋海棠は羅湘綺と離れ、娘・梅宝を連れて放浪する。再度流れ着いた上海で、梅宝は実の母である羅湘綺に会う。再会を前にして、秋海棠は、自らの傷ついた顔を見せぬよう自殺してしまう[三須 2020: 1737-1738]。

『秋海棠』は中国文学の直輸入であったが、京都大学所蔵の『蕉風』を閲覧していくと、第115期に「馬來文学与文化的形成」という記事が見つかる[温 1962: 3]。そこでは「マラヤ文学(馬來文学)」という用語が使われ、マラヤ連邦という独立した新たな国家の中で「われわれは団結と平等の原則を保持し、各民族の相互理解を促進するよう努力し、民主的な考えへの忠実からマラヤ(馬來)の新しい文化が生み出されれば、それはマラヤ(馬來)(の各民族)を融合させ新たに統一された民族を生み出すであろう」と述べている。温はペナン光華日報の副刊の編集者をつとめ[小木 1977: 195(1021)]ており、独立後のマレーシアで華人がどのように国民統合に参加する

11) 京都大学東南アジア地域研究研究所の所蔵は第70期、第71期、第91期、第96期、第98期、第104号から第234号までは欠号はあるがおおむね所蔵がある。第340号から最新号までもほぼ所蔵されている。

のか、その議論の一端がうかがえる。

その後、1963年と1966年に行われた2回の文芸座談会では、より詳細にマレーシアという新しい国家の中での文学創作者の役割について議論されている。

1963年8月10日の座談会には26人の文学創作者が参加した[宋 1963: 2]。出席者はすべて漢字名で表記され、会議の記録は中国語でとられており、しかも翻訳の項目で「マレー(馬來)文学」という用語が見られる。実際に座談会で議論されたのは「馬華文学」であった[座談会1963a: 3-4]。1963年8月11日の座談会にも22名以上の文学創作者が参加した[座談会1963b: 3]。「馬華文壇」という用語が使われ、「馬華文学」について正面から議論がたたかわされている。

筆者にとって印象的だったのは、馬華文壇で強調されている「新現実主義」はマラヤ共産党の「革命現実主義」であり、文学を革命闘争の道具として指摘していることである[座談会 1963b: 4]。「美元団体」、「緑背団体」であり、反共を掲げる友聯社の座談会ならではの指摘ではないだろうか。ただし、座談会の最後には「文芸工作者は、この新しく誕生した国家の中で、百花斉放で鳥が歌い花が咲く文芸の園を開拓せねばならない(文芸工作者必能在我們這個新興的国家裏, 開拓出一片百花齊放, 鳥語花香織的文藝園圃来)」という表現が使われ、独立したマレーシア国家の中での華語文学という位置づけが強く認識されている。

1966年の座談会は、1963年の座談会の議論を踏まえて、小人数でより踏み込んだ議論を行っている。最初の回の座談会には7名が参加し、最初回でマレーシアにおける文学作品の読者と作品を分析した[本刊文芸座談会 1966a: 4-7]。この座談会で扱ったのは「馬華文学」であった。読者層は中高生、家庭の主婦、職業青年、知識人に分けられるが、一番多いのが中高生であり、職業青年が続き、もっとも少ないのが知識人である。文学性の低い作品ほど読者から歓迎される。また、マレーシアのローカルな生活を反映した作品がもっとも求められている。ビジネス上の計算から、マレーシアで文学作品を出版するのをためらう出版社は多いが、実際にはマレーシアには華語文学の受容層が一定程度存在し、香港の文学作品の主な市場となっていることが指摘された。

1966年の2回目の座談会も6人と小規模であった

が、「マレーシア文学(馬來西亜文学)」の定義をめぐり、使用言語をめぐってより深い議論が交わされた[本刊文芸座談会1966b: 4-5]。マレーシア文学とはマレーシアの各民族が理解することのできる文学であり、国語、すなわちマレー語を通じてはじめて実現できるものである。しかし、現実には国語を使って文学作品を創作できる作家は限られており、座談会は「マレー語で表現された作品こそがマレーシア文学である」に見解を取収させていない。言い換えれば、マレー語を習得するまでの過渡期において、マレー語を使用しない馬華文学もまたマレーシア文学の一部である。また、「馬華文学」(マラヤ/マレーシア華語文学)で使われる/使われてきた華語は文法や用語の面で中国の華文とは異なり、すでに多くのマレー語やインド系の言語が浸透している。

1962年の記事は半ページであったが、1963年の座談会の記事は要約が2ページにわたって掲載された。それが1966年になると、4ページの記事となり、座談会での個々人の発言までを採録するようになってきた。さらに1971年の第220期(1971年4月5月合併号)では「馬來文学」特集号が企画された。しかも、1963年と66年の座談会とは異なり、71年の特集号では馬華文学を取り扱っていない。「マレー文学」特集号では、マレー語で表記されたマレーシア文学と、インドネシア語で表記されたインドネシア文学のみを取り上げた。これは友聯社の現地化の進展を象徴しているように思われる。

以上より、1950年代から60年代の友聯社の『蕉風』は、新たな国民国家の中での現地化と、マラヤ共産党とは一線を画した華語文学活動というふたつの大きな課題に取り組んでいたと、資料から読み取れる。マラヤの地で、アメリカに支援された「緑背」である友聯社が、マラヤ共産党に支援された「紅背」グループと文学をめぐる競争を繰り広げたことは、冷戦構造を象徴しているように筆者には思える。友聯社がマレーシアで「紅背」に対抗して文学活動を展開していたことこそが、文化冷戦の展開の事例ととらえることができるのではないだろうか。

おわりに

本稿では、盧瑋鑾と熊志琴(共編)による『香港文

化衆声道』と香港出版学会による『書山有路』を利用して、友聯社の成立、シンガポールやマレーシアでの活動についてまとめた。この2つの資料から、創立期の友聯は日本軍政終了後の香港の外省人コミュニティを背景に持っていることがわかった。香港の東南アジアとの書籍ビジネスを概観することで、友聯が東南アジアに事務所を構えたことは、経済効率を無視したものではないことがわかる。当地には華僑華人コミュニティが存在し、華僑学校もあり、そこで使う書籍には多大な需要があった。古梅は「マレーシアは香港よりも面が大きく、シンガポールとマレーシアに行くのは新しい市場を開拓することだった」、「発展の空間も大きく、需要も大きかった。華文教育を推進しようとするなら、華文教科書の需要は小さくなかった」と語っている[盧・熊 2014: 98]。

次の課題として、『蕉風』を通して、いかに香港とシンガポールとマレーシアとの間で文化交流があったのかを、2つの地域に跨って活躍していた文化人の例を整理してみたい[余 2018: 140; 小木 1976; 小木 1977]。たとえば、劉以鬯は日本軍政終了後の南来文人の代表として香港で評価されているが、1952年から1957年までシンガポールに滞在した[香港出版学会 2018: 22]。『蕉風』第143期は「革新号」と題され、『蕉風』事務所がシンガポールからマレーシアへと移った時期と重なる。その号では劉以鬯が「借り物の論理と技巧(借来的論理与技巧)」を寄稿[54 1964: 19-21]しており、香港とシンガポール・マレーシアとの交流の一端がうかがえる。

前述の1963年と1966年の座談会を主催した黄崖は1950年に香港に移民し、『大学生活』や『中国学生週報』の編集に参加し、1959年からマラヤ(マレーシア)で『蕉風』や『学生週報』を編集した。文学創作では現地を題材にとった作品があり、1992年にバンコクで永眠した[小木 1977: 192(1018); 盧・熊 2014: 19]。長年『蕉風』の編集をつとめた姚拓も1950年に香港に移民し、その後友聯社に参加した。1957年にシンガポール・マラヤに移住し、『学生週報』『蕉風』などの編集作業にあたった。短編小説の創作を得意としたが、題材は現地ではないものが多かった。2009年にマレーシアで永眠した[小木 1976: 218 (820); 盧・熊 2014: 19]。

本稿執筆を通して、台湾における馬華文学の研究

成果にも気がついた。『蕉風』については、林春美の『《蕉風》与非左翼的马華文学』(2021)がある。謝川成の『馬華現代主義文学的伝播 1959-1989』も『蕉風』をとりあげている。謝川成の『馬來西亞天狼星詩社創辦人:温任平作品研究』(2014)と、温任平のシンポジウムでの講演記録やワーキングペーパーを集めた『馬華文学板塊觀察』(2015)も出版されている。温任平は、マレーシアのペラ州イポーの生まれで、天狼星詩社(1972年-1989年)を創立した[小木 1977: 1021]。弟の温瑞安は香港や中国大陆で武俠小説を発表し、金庸と古龍、梁羽生とともに四大武俠小説家と称された[丁 2019: 222]。このような個々の事実にも注目しながら、香港とシンガポール・マレーシアとの交流、香港とシンガポール・マレーシアとの出版ネットワークの展開について分析を進めていきたい。

参考文献

日本語

- 小木裕文(1976)「馬華作家小伝(馬華文学参考資料)」(上)『中京大学教養論叢』第17巻第3号、793-825頁。
- 小木裕文(1977)「馬華作家小伝(馬華文学参考資料)」(下)『中京大学教養論叢』第17巻第4号、1005-1048頁。
- 篠崎香織(2020)「1950-60年代のシンガポールにおける華語文芸世界とマレー語文芸世界との交差」光成歩・山本博之編『『カラム』の時代XI——マレー・イスラム世界の女性と近代』(CIRAS discussion paper No. 92)、61-74頁、https://doi.org/10.14989/CIRASDP_92_61。
- 坪井祐司・村井寛志(2011)「マレーシア華人新村の形成過程と地方政治——スレンバン近郊の2新村における現地調査から」『人文学研究所報』(神奈川大学)、第45号、77-84頁。
- 中村元哉(2018)『中国、香港、台湾におけるリベラリズムの系譜』有志舎。
- 三須祐介(2020)「『秋海棠』から『紅伶涙』へ——近現代中国文芸作品における男旦と“男性性”をめぐる」『立命館文学』第667号、1738-1723頁。

英語

- Gittings, John. (1972) “China-watch in Hongkong.” *Journal of Contemporary Asia*. 2(4). pp.415-425.

- Hong Kong Baptist University Library. (2019) "About the Collection". Contemporary China Research Collection, Hong Kong Baptist University Library. <<https://library.hkbu.edu.hk/collections/special-collections-archives/contemporary-china-research-collection/ccrc-about/>> (2022年1月23日最終閲覧).
- Vogel, Ezra. F. (2004) "The First Forty Years of the Universities Service Centre for China Studies" 『香港中文大学中国研究服務中心』、香港：香港中文大学中国研究服務中心。作成されたのは、内容から考えて2019年以降と推測される。2020年末香港まで中文大学中国研究服務中心のウェブサイトに掲載されていた。同中心が2022年1月に中文大学図書館の一部となって以降、同資料はウェブサイトには見当たらない。Vogel氏の論稿は香港中文大学中国研究服務中心のウェブサイト内の「民間歴史」の中で閲覧可能。<<http://mjsh.usc.cuhk.edu.hk/book.aspx?cid=2&tid=8313&pid=12928>> (2022年1月23日閲覧).
- 中国語**
- 本刊文芸座談会 (1966a) 「馬來西亞的讀者和作品」『蕉風』第167期 (1966年9月号)、4-7頁。
- 本刊文芸座談会 (1966b) 「馬來西亞文学」『蕉風』第169期 (1966年11月号)、4-7頁。
- 滄海客 (1955) 「『秋海棠』的人物形象」『蕉風』第70期 (1958年9月25日号)、10-13頁。
- 陳正茂 (編著) (2011) 『五〇年代香港第三勢力運動蒐秘』台北：秀威資訊科技股份有限公司。
- 陳正茂 「第三勢力運動——『自由陣線』集团的興衰」『新浪網——歷史頻道』2014年12月21日。<<http://history.sina.com.cn/bk/mgs/2014-12-21/2124112860.shtml>> (2022年1月24日最終閲覧)。
- 從立新 (2019) 「『文革』時期北京師範大学的非正常死亡(上)」『文革博物館通訊 (998)・華夏文摘增刊第1166期 (zk1903b)』中国新聞電腦網絡 (CND) 主辦、2019年3月5日出版、<<http://www.cnd.org/cr/ZK19/cr998.gb.html>> (2022年1月23日最終閲覧)。
- 丁倩 (2019) 「温瑞安小说中的詩情画意」『戲劇之家』第18号、222-224頁。温瑞安について Wikipedia も百度も立項。台湾への留学、台湾からの国外退去処分 (1980年)、香港定住 (1981年)、中国大陸での滞在 (1990-98年) などの記述あり。
- 傅葆石 (2019) 「文化冷戰在香港——『中国学生周報』与亞洲基金会、1950-1970(下)」『二十一世紀』第174期 (2019年8月号)、67-82頁。<<https://www.cuhk.edu.hk/ics/21c/media/articles/c173-201901012.pdf>> (2022年1月24日最終閲覧)。
- 黃錦樹 (2021) 「推薦序」林春美『『蕉風』与非左翼的馬華文学』台北：時報出版文化出版企業股份有限公司 (Kindle版)。
- 黃克武 (2020) 『顧孟餘的清高——中国近代史的一種可能』香港：香港中文大学出版社。
- 林春美 (2021) 『『蕉風』与非左翼的馬華文学』台北：時報出版文化出版企業股份有限公司 (Kindle版)。
- 劉以鬯 (1964) 「借来的理論与技巧」『蕉風』第143期 (1964年9月号)、19-21頁。
- 盧瑋鑾・熊志琴 (2014) 『香港文化衆声道』第1卷、香港：三聯書店 (香港) 有限公司。
- 盧瑋鑾・熊志琴 (2017) 『香港文化衆声道』第2卷、香港：三聯書店 (香港) 有限公司。
- 宋子衡 (1963) 「編者的話」『蕉風』第131期 (1963年9月号)、2頁。
- 温任平 (2015) 『馬華文学板塊觀察』台北：秀威資訊科技股份有限公司。
- 温梓川 (1962) 「馬來亞文学与文化的形成」『蕉風』第115期 (1962年5月号)、3頁。
- 翁平 (1955) 「我看『秋海棠』」『蕉風』第71期 (1958年10月10日号)、12-13頁。
- 香港出版学会 (2018) 『書山有路——香港出版人口述歷史』、香港：香港出版学会。
- 香港中文大学大学図書館 (2003) 「『中国学生周報』(網上版) 七月廿一日面世」香港中文大学大学図書館文学資料庫、2003年7月18日、<<https://hklit.lib.cuhk.edu.hk/newsletters/%E3%80%8A%E4%B8%AD%E5%9C%8B%E5%AD%B8%E7%94%9F%E5%91%A8%E5%A0%B1%E3%80%8B%E4%BC%88%E7%B6%B2%E4%B8%8A%E7%89%88%E4%BC%89%E4%B8%83%E6%9C%88%E5%BB%BF%E4%B8%80%E6%97%A5%E9%9D%A2%E4%B8%96/>> (2021年12月15日最終閲覧)。
- 香港中文大学大学図書館 (2008) 「自由出版社」『香港文学通訊』第56期、2008年3月25日、<<https://hklit.lib.cuhk.edu.hk/newsletter/?issue=56#2>> (2022年1月2日最終閲覧)。
- 小丞 (1955) 「由秋海棠想到劉喜奎」『蕉風』第71期 (1958年10月10日号)、14-15頁。
- 謝川成 (2014) 『馬來西亞天狼星詩社創辦入：温任平作品研究』台北：秀威資訊科技股份有限公司。
- 謝川成 (2019) 『馬華現代主義文学的傳播 1959-1989』台北：秀威資訊科技股份有限公司 (Kindle版)。
- 余英時 (2018) 『余英時回憶錄』台北：允晨文化實業股份有限公司。
- 座談会 (1963a) 「我們的基本信念」『蕉風』第131期 (1963年9月号)、3-4頁。
- 座談会 (1963b) 「我們对馬華文壇的看法」『蕉風』第133期 (1963年11月号)、3-4頁。

友聯社的成立及其於東南亞的出版網絡

1950和60年代，香港被捲入以美國為中心的冷戰體系中。而冷戰對香港的影響不限於對其轉口貿易功能的破壞，文化一環也深受影響。本文會以友聯社作為分析對象，以助將來進一步探討冷戰對香港文化方面的影響。友聯社是美國支持的「綠背團體」中最成功的一個。本文根據盧瑋鑾和熊志琴合編的《香港文化眾聲道》訪談集，梳理了該會創立時的情況和創會幹部的特點。創會幹部於1949年前從中國大陸的大學畢業後南下香港，採取明確的反共立場，同時與第三勢力保持密切聯繫。香港出版業在二戰前已視東南亞的華人為圖書業務的市場。友聯社也在1955年發展至新加坡，發行了文藝雜誌《蕉風半月刊》，並辦理《中國學生周報》等友聯出版社的書刊代理業務，後於1958年將辦事處遷往吉隆坡，《蕉風》改在馬來西亞出版。從其創刊的《蕉風》的座談會記事中可見，星馬友聯社將華文文學的發展與馬來亞共產黨支持的「紅背團體」劃清界線，並試圖在剛建國的馬來西亞發展華文文學。

The Establishment of the Union Cultural Organization and Its Publishing Network with Southeast Asia.

In the 1950s and 1960s, Hong Kong was involved in the structure of the Cold War, with the United States at its center, not only in the economic aspect but also in a cultural sense. This article takes the Union Cultural Organization as the subject of analysis. The Union was one of the most successful of the US-supported 'greenback groups.' This article explains the circumstances of the Union's establishment and the characteristics of its founding core members, based on a collection of interviews with Lo Wai Luen and Jean Hung's *Xianggang wenhua zhongshengdao* (A Kaleidoscope of Hong Kong Culture). The founding core members arrived in Hong Kong in the post-1949 period, were university graduates in mainland China, and adopted a clear anti-Chinese Communist Party stance while maintaining close ties with the Third Force. The Union opened a Singapore office in 1955 and subsequently moved its office to Kuala Lumpur in 1958. In fact, the Hong Kong publishing industry had already made overseas Chinese in Southeast Asia its market for books during the pre-war period. As the articles in the *Chaofoon* shows, the Union tackled two agendas: localization and competition with the Malayan Communist Party-supported 'red-back groups.' In the newly-independent Malaysia, the Union searched for a development direction for literature written by Chinese language.